

対話する社会を目指した乳幼児期の環境

——北欧の幼児教育からの一考察——

大 崎 亜 友 美*

Making a Society Stressed on Dialogue and Environmental Education for Infant Children:
Early Childhood Education in Scandinavian Countries Perspective

Ayumi OSAKI*

はじめに

生態系は循環することでバランスを保ち、動植物間で共生する。後戻りできなくなるところまで自然環境を悪化させた人間は、未だに世界で足並みをそろえて課題に取り組むことができずにいる。スウェーデン出身の16歳、グreta・トゥーンベリは、気候変動への緊急対策を訴え、一人ひとりが行動することの意味にも気づかせてくれた。社会的地位や権力に屈せず、地球市民の一人として行動する彼女は眩しい。

人々に自然享受権の意識があり、環境教育への意識が高いスウェーデンは福祉国家であり、学力調査では世界のトップにある。国民に根付くのは対話する社会を構築する姿勢である。生まれた時から他者と相互に支え合いながら社会の一員として暮らす時、私たちは社会と自己への責任を持つ。対話する社会は個を育てる。対話する個は社会を豊かにする。

本稿では、2018年9月のスウェーデン・ノルウェー両国の幼児教育施設視察を踏まえて、対話する社会を構築する手がかりを探る。

1. 社会に生きる一人として

(1) 保育士として歩む、わたしの葛藤

筆者は、公立保育園に3年勤務後、児童発達支援センター（以下、センター）に異動、知的障害児クラスを担当して6年目を迎えた。

保育園勤務時代、自分の理想の保育と現実とのギャップをうめられず、個を生かした集団づくりができなかった。また、子どもを大声で呼び集め、静かにさせるためにまた大声が飛び交う保育は、子どもの小さな変化に気づく、ゆったりとして柔軟性のある空気感を生み、違和感を覚えた。個の理解が集団の育ちにつながることを実感したい思いが療育を学ぶきっかけとなり、今日に至る¹⁾。

発達保障の理念を土台に、子どもの発達への願いに気づき関わる保育者の姿勢は魅力的で、一人ひとりの子どもが達成感をもって過ごせる環境を考える日々は、障害があるうとなかろうと、一人の人の向き合い方を教えてくれた²⁾。

(2) 柔らかな眼差しを広げる

子どもの育ちを支えるとは、家族を支えることでもある。家族には色々な形がある。“当たり前”に囚われず、「何が子どもとその家族にとって価値あることなのかを認識する価値意識」(19-198)を柔軟にし、我が子と歩む未来の一つでも多く幸せを感じる瞬間があるように横並びで歩き、時には道しるべとして前を歩き、家族がよりよく暮らすための支えになりたい。

柔らかな眼差しで子どもの発達を支援することができ始めた今、その眼差しは地域社会に広げる必要がある。ある保護者は、我が子と遊びに行った公園で、地域のお母さんに子育てでサロンを紹介されたが、障害があり落ち着きがない我が子の姿を伝えると来る事を断られた。地域で子育てをしたいと“当たり前”に願っても、当事者意識のない社会は、「障害」が「障害」となり、疎外感を味わう家族を生む。

社会人になるとはどういうことか。暉峻は、ドイツ人の「自分が社会の連携の中にいることを自覚すること」(18-159)という返答から彼我の違いを問う。ドイツは公共の質を高めることが個人の生活の質の高まりにつながり、考え方が違う人たちが集まって根気よく話し合い、協力して公共を創り出す習慣がある。日本はそこが欠けているために住民意識が弱いと指摘する。ハンセン病の歴史のように、無知から作られる偏見をそのままにする気質が残ってはいないだろうか。先のような返答ができるのは、ドイツ人が幼少期から社会の一員として認められて育った経験があるからであろう。

私たちは、地域社会を変革する一人という自覚を持って生きているだろうか。「全体性をもつ人間」(18-200)になれるかが問われている。

* 広島市児童発達支援センター保育士（本学初等教育学科第27期生）

2. 私たちが見たい未来

戦争、略奪、差別という失敗を繰り返しながら、平和を希求し行動してきた人々の歴史の上に私たちの今がある。私たちの生き方が後世にわたるかなギフトとなるためには、世界で足並みをそろえる必要がある。後世に今の代償を払わせる世界であってはならない。

(1) 持続可能な開発目標を指針に

2015年9月、「国連持続可能な開発サミット」で採択された、SDGs (Sustainable Development Goals) は、2030年を一つの区切りとし、地球上で暮らす人々が、より幸せに生活していけるようにと、世界の国が約束した17の持続可能な開発目標である。この目標は、地球市民として物事を考え、過去の過ちや結果から学び、恵みを与えてくれる自然環境の保全を最優先重要課題として取り組むことで実現される³⁾。

(2) 子どもの最善の利益保障を

SDGs が目指す世界は、「子どもたちに投資し、すべての子どもが暴力や搾取から解放される世界」(⑦-14) である。子どもは、守られるべき「脆弱な人々」であり、かつ「重要な変化の担い手」と位置付けられる。

ユニセフ前事務局長アンソニー・レイクは、1989年に国連で採択された子どもの権利条約が謳う人権保障が実現できない世界に警鐘を鳴らす。「子どもたちは生まれる場所を選ぶわけにはいかないのに、『コミュニティや家族がどれだけ不利な立場にあり、差別を受けているかにより、子どもたちが生きるか死ぬか、また学ぶチャンスが与えられるかどうか、ほどほどのお金を稼げるようになるかどうかを決定づける。紛争、危機、気候関連の災害は、子どもたちから多くのものを奪い、彼らの可能性を減少させる。』」(同頁) と言う⁴⁾。

2018年、日本が教育にかける公的支出の割合は2.9%と OECD の中でも最下位。私支出が補うことで教育が成り立つ。私支出ができない、地べたの生活を営む子どもに、最善の利益を保障しているとは言えない。2019年度からの5年間で27兆4700億円の軍事費投入を計画する国に生まれた子どもは、自身が社会の担い手となった時にどのような未来を描いて指導者を選ぶか。

北欧の街づくりを見て、持続可能な社会に必要なことを考えて行動する大人の姿が、子どもに希望をつくと感じた。身近なところから行動を起こすことは、遠回りのようであっても世界を変化させる。乳幼児期に経験した心地よさや安心感はその人を生涯支える。

3. 教育はみんなのもの

スウェーデンは、二度の世界大戦で中立同盟を貫き、第二次世界大戦後は国際舞台で和平や軍縮をリードし、子どもの権利条約の採択にも尽力した。2015年には163,000人(人口当たりの数は欧州一)の難民を

受け入れる。教育費の対 GDP 比は約8%と世界のトップ水準にある。教育法の対象は1歳からで、生涯にわたって学び続けられるシステムが構築されている。授業料は基本的に無料となる。

川崎は、先進国が抱える高齢化問題は高福祉施策で対応し、男女平等と働き方政策を含む子育て政策を実現させて少子化を克服し、1990年代の不況も、高いイノベーション力、産業の「知業化」とグローバル化、そして、医療、介護、年金等の福祉システムの見直しで乗り越えたとする。これらの政策からみえるのは、「福祉と経済の両立は可能であり、知業社会では、むしろ福祉と経済が相互補完関係にある構図」(⑨-13)で、その鍵は教育にあると言う⁵⁾。

(1) スウェーデンの幼児教育⁶⁾

白石は、スウェーデンでは保育の質を3つの側面から捉えると言う。第1は保育実践の前提となる構造的条件(特に人的環境の改善)、第2に保育事業における内容の向上、第3に目標の達成状況の評価である。(⑩-ii)

幼保一元化がなされ、就学前学校と呼ばれる幼児教育施設は、就学前カリキュラムの到達目標を目指して行われる。1歳～5歳までの子どもが在籍し、12～18人の異年齢クラスに、通常、就学前学校教師1人、アシスタント2人が配属される。安定した人間関係の中で経験が積み重ねられるように複数の担任が子ども集団をもちあがりて担当することが多い。

(2) スウェーデンの教育の根幹

教育の根幹は、次の6つである。

①民主主義

1962年の小中学校制導入時に、「基本的な民主主義的価値観を確立するためには教育内容だけではなく、実際の教育活動に重点を置くべきであって、民主主義がどのように機能するのかを体験的に教える必要がある」(③-ii) とされた。

就学前学校も民主主義の土台の上に立つ。就学前カリキュラムには、社会の基礎にある人権及び民主主義の価値観を尊重させること、大人は子どもが信頼感と自信を持つように支援し、子どもたちの好奇心、起業家精神、そして興味を励まし、学ぶ意欲と意思を刺激することが重要な責務だと明記してある。また、保育者の役割として「子どもが自分の意見を表現する機会を設け、民主的な方法で日々の活動に参加できるように援助すること」(⑩-8) が挙げられ、子どもの声を保育に生かすための活動方法として、教育的ドキュメンテーションを導入する。筆者が視察した全ての園の保育者も、最重要課題を「民主主義」と口にした。国民一人ひとりが主権者であると実感することが民主主義を機能させる。

②主権者教育

若者の政治離れや政治意識の希薄化が問題視される日本。その議論でよく引き合いに出されるスウェーデ

ンとの違いは、「自分の行動が政府の決定に影響を与える可能性に対する期待感」(⑪-はじめ)である。高見は、学校生活を受け身ではなく、自ら参画するという民主主義の姿勢を体験することで、色々な情報を鵜呑みにせず、自分で批判的に考え、自分の意見を持ち、自らの行動に責任が取れる大人を目標にしていることが、投票率80%を維持する所以だという。(⑩-116)

鈴木は、スウェーデンの若者が選挙権をもつ前から高い主権者意識をもつ理由は基礎学校で用いられる教科書にあると言う⁷⁾。スウェーデンの教科書は、「教育指導要領 (LGR11)」に準拠する。LGR11の策定に携わったスウェーデン教育界の第一人者であるスパネリッドは、「分析力」「伝達力」「情報収集能力」「理解力」「メタ認知能力」の5つが社会科教科書において習得すべき能力であると提唱する。「覚えよう」ではなく、「考えよう」というスタイルの教科書は、①原因②結果③比較④解決策⑤解決策の評価⑥関連性の説明の順序をとる。スウェーデンの多くの若者は、一般的・基本的知識を身につける上で学校に通う意義があったと答える。一方的にどちらが良いという答えを押しつけず、自分で答えを模索するように促す学び方は、考えるおもしろさを体感させる。(⑪)

③起業家精神教育

起業家精神教育は、知業時代に対応する広範な教育の意識改革として、フィンランド西部バルト海岸の小都市パーサで始まった。1980年代からは、内的と外的の2つの側面に分けられた。外的起業家精神とは、「独自のビジネスをスタートさせ、経営することであり、一般的に起業家精神と言われているもの」(⑨-15)、一方の内的起業家精神とは、「起業家的特徴または外的起業家精神の前提条件」(同頁)で、「創造性、自己効力感 (self-efficacy)、柔軟性、活動、勇気、イニシアティブとリスク管理、方向性、協調性とネットワーク能力、ものごとを達成するモチベーション、常に学び続ける態度、空想性、豊かな発想、我慢強さなど」(同頁)を意味する。内的起業家精神の豊かな児童は、創造的で、勇気があり、目的意識が明確で、オープンであり、協動的で、積極的で、責任感に富み、根気強く、自信をもち、他の子どもとうまく関わるとされる。フィンランド教育省は起業家精神を、アイデアを行動に翻訳する個人の能力と定義する。学ぶこと自体が楽しく、喜びであり、自己実現の方法であると考えた北欧諸国民の価値観は、起業家精神教育に支えられる。川崎は、教師が知識の伝達よりも生徒の提案を奨励することや自分で責任を負うことを手助けすること、つまりコーディネーターとしての役割を意識する契機となった教育改革も重要であったと言う。常に変化する現代社会において全ての人に求められる精神はスウェーデンにも定着した。

④インクルーシブ教育

インクルーシブ教育が浸透するこの国において、障害、経済的な事情、移民・難民、性別や人種、宗教等、子どものバックグラウンドにかかわらず、地域の学校で同じ価値がある教育を分け隔てなく受ける権利を保障する。

⑤自然享受権⁸⁾

慣習法として受け継がれた自然享受権は、土地の所有者に損害を与えない限りにおいて、全ての人に対して他人の土地への立ち入りや自然環境の享受を認める権利である。自分の土地でなくとも、散歩をしたり、木の実を拾ったりすることが可能で、園庭を所有しない園も自然の中で遊ぶ機会を保障できる。「天気ではなく服装が悪い」と、雨の日にカッパや長靴を身につけて戸外で遊ぶ姿は自然享受権が慣習法としてあったからこそ生まれた生活文化だろう。

生態系の循環に組み込まれる人間にとって、自然を享受することは生きる上での権利でもある。自然の中で過ごす心地よさや遊ぶ楽しさを感じた上でその重要性を学び合う経験は、循環の中に私を感じ、自然保護意識を高めると共に、生物多様性・文化多様性を尊重する価値観を育む。

⑥レッジョ・エミリア・アプローチからの学び

1981年、レッジョ・エミリア (以下、レッジョ) 展覧会の開催を機に、1993年に「ストックホルム・プロジェクト」を開始、1998年に公布された就学前カリキュラムにその成果が盛り込まれた。現在もレッジョとの交流を継続する。レッジョを語る時に必ず出てくる、ローリス・マラグッツィが残した「100のことば」は、民主主義が根底にあるスウェーデンだからこそいち早く受け入れられたのだろう⁹⁾。

1970年代から対話教育法が取り入れられ、その上にレッジョの子ども観を織り込んだスウェーデンは大きな転換を見せた。経済成長、多文化共生、持続可能性をパラレルに推し進めるスウェーデンの教育への姿勢から社会のあり方を問い直したい。

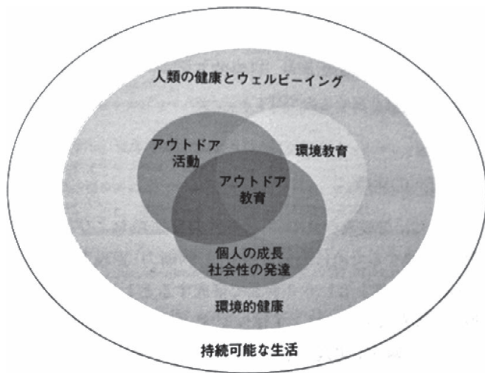
(3) アウトドア教育が「全体性のある人間」を育む¹⁰⁾

環境教育は、スウェーデンで重要視されるものの一つである。人間行動生物学研究者のショールンデルは、「人が自然への興味を抱くことは自然には起こりえない」(③-157)という。環境リテラシーを高め、持続可能な社会を実現する鍵となるのは、アウトドア教育である。「環境への関与は高い環境意識、持続可能な社会、それからグローバル化の知識への理解を深めることにもつながる」(③-iv)と言う証拠に、スウェーデンの産業の中でも農林業の輸出は高い収益を上げ、持続可能な実践を世界でリードすると鈴木は説明する。富を生み出すのも環境意識の高さであり、「木の生息なくして、人の存在なし」、「成長するためには時間が必要」、「幸福感は森で育つ」といった教育戦略で国際競争力を強めた結果だと見る。以下、重要

なことなので引用が長くなる。

①アウトドア教育とは

スウェーデン王立リンショーピング大学では、アウトドア教育を「環境教育と健康の結合による持続可能な学びと位置づけ、環境教育、アウトドア活動、自尊心とチームプレイ（個人の成長、社会性の発達）、健康（人類の健康とウェルビーイング）、持続可能性（持続可能な生活）の5つの分野を扱う包括的なコンセプト」(③-vii)を掲げる。(図1)活動の場は、人にとってリアリティの高い物質的な場所、すわなち教室の外（社会的・自然的・文化的ランドスケープ）に拡大され、経験とその振り返りによる学びに注目したアプローチである。複数の科目とアウトドア活動から得られたスキルが互いに補完し合う。また、地域社会や職業生活との結びつきが重要視され、長期的に学ぶことで、考えるスキル、働くスキル、コミュニケーションスキル、専門的スキル、日常的スキル、参加および影響力のスキル、持続可能な未来を築くといった総合的な未来のスキルを重視している。身体感覚的な相互作用はアウトドアでの教育と学習を理解するための重要な礎になるという。



(図1) リンショーピング大学のアウトドア教育の概念 (③-vii)

②アウトドア教育の始まり

難波によると、アウトドア教育の原点の一つと考えられるのは、デンマークの森の幼稚園である。(③)

1952年、コペンハーゲン近郊の町で、1人の母親が我が子を連れて森で遊んでいたところに、他の母親たちも加わり始めた。それがやがて「森の幼稚園」と呼ばれるようになり、各地に広がった。難波は、一人の母親の人生観、育児観で始まった理由に、デンマークの政治、教育、文化のあらゆる分野に功績を残した牧師、グルントヴィの存在を挙げる。

グルントヴィは、「たび重なる敗戦で社会は疲弊して、人々は未来への展望がなく生きる意欲を失っていて、自分さえよければいいという自己中心的態度が横行」(③-xii)していたデンマーク情勢の原因を教

育だとし、当時の学校を「死の学校」と批判した。「『テキストを機械的に暗記させ、エリートの子どもたちに親の特権的な社会的地位を引き継がす準備をする学校』『虫けら（教師）が、生を犠牲にして贅沢に暮らす、分解と死の職場である』(Finn, 1983)と、試験や体罰で強制的に学ばせる教育を批判し、自己中心的な民衆を変えるためには『生の啓蒙』のための学校が必要である」(同頁)と考え、教科書主義ではなく「生きたことば」によって教育をする「生のための学校」、フォルケ・ホイスコレを提唱した。そして、学校は「『自分とは何か』『どう生きるべきか』を考えるためであって、また、他者との相互作用による自己認識を目的とし、アイデンティティの確立や人生観の形成のため」(同頁)にあるものと考え、試験がなく、卒業資格も与えない全寮制の学校を始めた。

難波は、「生の啓蒙」を教育の目的とする考えは、デンマークの全ての教育に影響を与えたとする。さらに、自己中心的な人々に真の自由を体現させ導くために、教師と生徒の自由で対話的な関係を経験するための対話教育を重視したことが、結果として、個人主義社会に歩ませるのではなく、自由とは何かを知り民主主義の基礎となる価値観、教育や福祉の基本理念となって北欧諸国に広がったとみる。

グルントヴィの自由の概念とは、「自由であろうとする者は、その隣人に対してもそうしなければならない（『人間の記憶』、Grundtvig, 1877, 32頁）」(同頁)である。この自由観についてタニングは、「人間とは生のために、ある程度秩序を保たなければならない。一方、同時に選択が可能のように確保する。しかし自由はこのように、私たちは第一に自身の自由のために理解すべきではない。私たちは自身の自由より前に、自由を他人のために要求しなければならない(Thaning, 1972, 119頁)」(同頁)と述べる。

グルントヴィの教育思想実践者であるコルは、1981年に発行された著書『En undervisning afpasset efter børnenes evner og trang』において、「子どもたちの学校は過ちを犯してきた。学校はもっぱら理解力を相手に話し、感情には部分的にしか語りかけなかった。その間に、想像力の源となるファンタジーはほとんど忘れられてしまった」(③-xiii)と述べる。コルは、強制しなくても精神と肉体の自由が保証されれば子どもは成長することを自身の教育で証明し、「物語を語る」教育で成果をあげた。デンマークの政治家で教育大臣を務めたアナセンは、デンマークでは他の多くの国に比べ、地域や親が学校に大きな影響を及ぼすことが可能だという。それは、親が子どもを学校に通わせる義務ではなく、親には子どもを教育する義務があり、どのような教育を子どもに受けさせるのか、教育に対する決定権が親にあるからである。

デンマークの一人の母親の行動からおきた教育の問い直しは、母親たちの思いが反ファシズムのレジスタ

ンス運動の中でレジヨの教育を改革したと重なる。一人ひとりが足元を問うことで社会は変わることを実証した。社会を動かす力は、一人ひとりの内にある。デンマークの「森の幼稚園」が教えてくれる確固たることは、「子どもたちが自然環境の中で自由に過ごすことで、感性を育て、知的的好奇心、身体能力、集中力を養い、相互扶助の心を育むことに大きな成果をあげているという事実」(③-xiv)である。

4. 学び合う子どもと文化・暮らしを伝える大人

筆者は、スウェーデンでは幼児教育施設6園とNGO グリーンフラッグ認証機関、野外活動センタームッレボランティア大会、ノルウェーでは幼児教育施設2園を視察した。以下、森での活動の様子を見ることができた2園の概要・考察を資料として挙げる。

(1) スウェーデンの就学前学校：ブレンニンゲベーク就学前学校 (Fröskolan Bränningevägen)¹¹⁾

<資料>1歳～5歳までの子ども11人、保育者2人のグループが森で「釣り」の活動をしていた(図2)。子どもが拾ってきたマツボックリと木の枝に、保育者が毛糸をくくりつけ、釣竿を作っていた。2、3人の子どもが集まっており、友だちの釣竿が作られる間、じっと保育者の手元を見つめて待っていた。その後、集まって森の中にあるものを釣って遊んでいた。案内してくれた運営者のツアー・トーロは、「何が釣れたのかと子どもに聞くと、ちゃんと魚の名前を言う。生活の中で知識を得ている」と、遊びの中の学びを話した。ピクニックシートの上では、海のシーンのある絵本を読んでもらう子どもがいた。ボートや釣りに興味を持っているようで、釣りの動作をしながら絵本の世界を共有していた。

ツアーは、野外での活動を取り入れている理由を、「就学前カリキュラムの目標達成には、野外教育が一番いい方法だからだ、子どもを連れて出ないのは大人の怠慢だ」と断言した。「その場にあるものを使って遊んだり、自分の感覚を使って発見し、その体験を他の子どもと共有して学びを拡げることができるのが自然。何度も同じ遊びをすることで学び、自分の知識にしていくことで上達する。様々な発見をするには園庭では不十分」と言う。また、森に出かける活動を多く取り入れている園であるが、全ての保護者が自然の大切さを理解しているわけではないようだ。そのため、参観日には親子で森へ出かけて自然の中で遊び、「遊べない子どもは学べない、遊びの中に学びがある」ことを伝え、園の活動に理解を得る努力をされている。スウェーデンの子ども日本と同じように歩く機会が減少傾向にあり、課題とされる。

短時間の視察だったが、自然の中で遊ぶ子どもたちが喧嘩をする姿はなく、保育者も子ども同士の喧嘩が少ないと言っていた。それは、シェパンスキーが「水

と緑の空間に存在する素材を用いて、自然が強調された多様性のある学習環境を構成することはストレスを減らし、集中力を高めることが示されて」(③-iii)いるということの一例だろう。ツアーは、自然の中で過ごすことは大人にとってもメリットがあり、保育者自身がいい仕事をしていると感じられる、ストレスにならないと言い、保育者がストレスなく働ける環境を重視していた。その感覚は、カプラン夫妻(Kaplan&Kaplan, 1994)の研究で、「公園などの緑地があり、文化的なエリアに短時間でも身を置けば、結果として、勤務時間と余暇の時間に関係なく満足感を与え、回復効果をもたらす」(③-19)と証明されている。日本の現状も知っているツアーは、「自然環境に毎日出るということは、保育者が毎日要求されるということで、保育者自身が自然に出ることが楽しいと思えることが大事」と話した。「子どもの話をよく聞くこと、そのために5分遅れて園に帰っても問題はない」と、子どもを真ん中に活動を考える姿勢が見えた。一緒に調べる態度、同僚に話をする、体験を分かち合う等、職員同士のコミュニケーションも大事にしていた。



(図2) 森での活動の様子(筆者撮影、以下同様)

(2) ノルウェーの幼児教育施設：ヴィルヴェテン園 (Villvettene FRILUFTSBARNEHAGE)¹²⁾

<資料>森での活動拠点は、インディアンテントである(図3)。荷物を置いたり、サムリング¹³⁾で集う時に利用したりしている。森には遊びの基地となる、小川、アスレチック(ターザンロープ、ブランコ)、ボートがある。サムリングする場所が3か所程あり、座って焚火を囲ったり、石窯でパンを焼く保育者の様子を子どもが見たりできるよう設定されていた。

訪問時は小雨で、テントの中で朝のサムリングを行った。保育者が歌い出すと年長児も歌い、それにつられるように他の子どもが歌う。子どもの声は柔らかく、友だちと響きあう。保育者は子どもに言葉を手渡すように話す。サムリング後は、子どもも保育者も上下分かれたレインコートに長靴姿で、戸外で遊んだ。

気温7度の中、テントの側を流れる小川では、冷たい水をものともせず、器に水を入れ替えて遊ぶ。小さい子どもは年長児の遊びに憧れて、その姿を模倣して遊ぶ。初めて見る訪問者に緊張する子どももいただろうが、年長児が訪問者と関わりだしたことを機に、安心して話しかけてくる。最初にターザンロープで遊びだしたのも年齢の高い子どもだった。お尻が地面につく程、すれすれを降りる。斜面を滑り台のようにして、お尻で滑る子どももおり、全身でダイナミックに遊んでいた。異年齢で過ごすことで、自然に学び合いが生まれる。

この森で繰り返し展開される遊びは、海賊ごっこだという。海賊船が森にあり、バンダナを頭に巻いたり、木で剣を作ったり、船長や猫のようにフェイスペイントをしてもらってボートに乗りに行ったりしていた。ナイフは、大人でも扱うのにコツがいりそうなもの(図3)。削りやすいように、少し削った木が用意されていた。



(図3) (上) インディアンテントの前で過ごす保育者と子ども
(左下) 友だちや大人と関わりながら遊ぶ子ども
(右下) 剣づくりで使用するナイフ

寒い時は火で暖まる、木を割って薪を作る、パンを作る等、野外での過ごし方や生活の知恵を大人の姿から学ぶ場面もあった(図4)。スープを大きな鍋で煮始めると、いい香りに誘われて、焚火を囲うように置かれている木のベンチに子どもが集まり、いつの間にか集団ができた。自然と集いたくなる空間が作られる野外活動の魅力を感じた。



(図4) 昼食の支度を見にくる子ども

昼食時も小雨が降っており、テント付きの戸外のベンチかインディアンテントの中のどちらかを選んで食事することが伝えられ、筆者は戸外を選んだ子どもと一緒に食事した。狭い木のベンチに、友だちも座ることができるように寄る子どもたち。机はなく、配られたスープの器・パン・自分の水筒をどこに置き、どうやって食べるか、子どもたちは自分で考えていた。午前の活動時に、保育者にフェイスペイントをしてもらい、猫に変身した女兒3人は隣同士で座り、「ねずみが来たらどうする?」という話で盛り上がっている。「静かに」、「こぼれるよ」という大人の声飛び出すことなく、楽しんで食事する姿が印象的だった。昼食後すぐ遊びが開始された。

自然の中で自主的に遊び、友だちから学び、協力しながら過ごす。この園の取り組みや環境は羨ましい限りだった。北欧の地では、「雨が悪いのではなく服装が悪い」と言われる。そこで育つ子どもの姿が、筆者の保育の枠をひろげてくれた。

5. 自然と社会を軸にした教育を

川崎は、バブル崩壊以降日本経済が失われてきた理由に、教育も含めた社会システムが工業から知業経済への歴史的移行への対応に立ち遅れたことを挙げる(⑨-12)。戦後の日本教育制度は大学受験突破を目標として個性や長所を伸ばすよりも欠点のない子どもを育てる方に比重をかけたが、正解のないこの時代には何を選んで吸収するかという判断力、問題課題を自分で見つけるスキルが必要だとする。

(1) 幼児期に育てほしい「10の姿」

日本の幼児教育の指針である、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携認定子ども園教育・保育要領ならびに学習指導要領は、2017年3月に改められ、保育を含めた教育全体の21世紀バージョンへの転換として、「資質・能力を育てる」という目標概念が示された。

汐見は、保育所保育指針の改定・改訂は、ヨーロッパ諸国に遅れながらも、「幼児教育から大学教育まで同一の論理と方向づけで教育改革をはかろうとし、そのためにこそ幼児教育重視策の方向に進もうとする、日本の現代的な教育改革の一環」(⑩-4)とみる。「従来の知識集約型の学力、知性を克服して、①個別の知識やスキルを身につけることと並行して、②柔軟に考えたり、粘り強く工夫したり、友だちと相談したりしながら、そうした思考力、工夫力、判断力なども伸ばし、かつ③学んだことで、もっと学びたいという意欲や態度が身につくようになる」(同頁)と、3つの側面を説明し、この資質・能力の育成をより具体的な教育目標に近づけるために、幼児期の終わりまでに育てほしい姿が10項目で示されたとする。そして、この「10の姿」は、「今から20年後以降を社会人として生きる今の乳幼児たちが、今も、将来も、人間らしく、共感的に、深い生き甲斐をもって生きることができるようになるには、こうした資質・能力を有していることが必要」(⑩-5)と思われる視点で選ばれているという。

ここに、アウトドア教育の視点はあのだろうか。自然享受権を意識せずとも、自然を取り入れ、季節に合わせて生活を営む中でつくられた日本文化だが、時代とともに自然への価値観は変化した。失いつつもの大きさに気づいた今こそ、自然に生かされていることをアウトドア教育を通して学ぶべきである。手つかずの森を学べる環境にすることが必須である。

(2) 現場から見た日本の幼児教育

公立保育園の現状はどうか。豊かな乳幼児期を過ごすには程遠い園庭の狭さや園舎の老朽化、保育士不足等の課題が山積みで、望ましい環境を整える難しさを感じる。広島市は、待機児童解消もできぬ現状下、国の方針を受けて、公立保育園の正規保育士を減らすと言う。さらに現場は苦しい状況に追い込まれる。保育士の低賃金雇用は、未来を担う子どもの今を軽視して

いることの表れであり、人の育ちが地域社会を活性化し、経済発展につながることを知らないからできることだろうか。子どもの権利条約が謳う、子どもの最善の利益の保障を実現するために取り組むべきことはある。

障害児教育においては、保護者の障害受容を支え、子どもの育ちを共に考えられる手厚い支援が必要であり、質の確保が極めて重要となる。しかし、その実現には制度的にも困難さを伴う。国家は、経済発展ばかりを思い描いて、ブラック企業化しているようにも思える。富の分配が機能せず、富を一人占めする社会を変えなければ、貧困の連鎖はくいよめることができない。福祉はビジネスではない。経済発展が数字として見える利潤を上げるために望まれるならば、方向転換をしなければならない。福祉と経済は両立する。その仕組みを構築するべきである。

暉峻が強調するように、「経済が人間のための経済であることを、そして人間とは商品ではなく生きる価値そのものをもった生き物であることを、日本の社会は決して忘れてはならない」(⑪-52)¹⁴⁾。

保育士の専門性が認められない現状に、行政も、保育士の今ある専門性とその向上に向けて支援し、評価し、幼児期に投資する予算を組むことが先決である。それが、幼児期の重要性を地域社会に広めることにつながる。大人も経験の総体が問われる。保育士の専門性や質の向上は、一朝一夕にはできるものではない。保育者自身が、仕事以外の時間を充実させ、安定した生活を営める給料保障があつてこそ、ワーク・ライフ・インテグレーションは具体化される。それが、幼児教育の仕事が続ける意欲となり、子どもと共に創りあげる日々の価値を体感することにもつながる。これが、目指したい「10の姿」、生きる価値を子どもに伝える条件となる。

スウェーデンにおいて、労働者の権利・賃金が守られているのは、労働者が組合活動を通して声を上げると同時に、賃金の低い企業等に働き手を送りださないように行動しているからだと言われている関係者が強調した。自分たちの既得権益を守るだけではなく、社会をよりよくするための行動である。社会経済の上に子どもの生活があることを認識し、世界や地域社会の課題は子どもが抱える課題ととらえて声をあげることが必要である。

6. 子どもへ手渡したい未来に

(1) 市民文化を創る

「10の姿」は、本来、大人がそこに到達しようとすることで子どもに伝えられる目標である。人間も循環の中で成り立つ。いつも問われるのは自分の哲学である。

まちの保育園・こども園代表の松本は、レッジョの保育・教育で大事にされるのは、「私たちがまだ手に

していないことを子どもに願うのではなく、私たち自身がありたい姿のために対話し、行動し、手にしていくことを子どもたちに手渡していく、あるいは子どもとともに手にしていく。そのことを教育のうえで、大事にし、『市民文化』をつくることの中に教育・保育がある」(22-42)と認識することだと述べる。

季節の移り変わりに合わせて生活を創り、文化を培ってきた私たちがつ、「子どもは自然の中で育つ」という日本の思想に、「子どもは文化と社会の中で育つ」というレジジョの思想を取り入れることで、文化は再構築される。レジジョが実践から確立してきた理念に学び、地域社会を自分たちの力で創りあげる効力感をもちたい。東京都世田谷で始まった「artenarra」はその一例である¹⁵⁾。

(2) 歴史教育

ドイツでは、教科書に掲載されるアウシュビッツでガス室に送られるユダヤ人の写真や、戦争に反対する平和主義者を銃殺している写真から事実を学ぶ。ドイツの教育者が、戦争が残酷であることを教えないでどうして子どもが平和を望むようになるのかと問うのはもっともである。民主主義・主権者・対話を否定した社会が生んだアウシュビッツ。日本においてもその3つが否定された過去があることを、歴史的事実として伝え、それを繰り返さない社会を創るために対話を進められるかどうか私たちに託されている。

筆者は、保育所時代から8月の平和学習が苦手であった。戦争を題材にした絵本や漫画映画は強烈だったからである。しかし、2019年9月、『おこりじぞう』(山口勇子原作/四國五郎絵/金の星社)の絵を担当した四國五郎を父に持つ四國光が、トラウマにすることで戦争に近づかないでほしい、と講演で話したことで心を救われた。戦争は残酷で恐ろしいというトラウマを持っていた幼少期が戦争を否定する身体をつくったのだと思えた。記録として残された表現物は戦中の人の思いを未来につなげる。バトンが、今を生きる人に渡されているのである。私たちは、対話する社会を選んだコスタリカのように、平和をつくりだす主権者を指すべきである¹⁶⁾。

(3) 「全体性を持つ人間」に

社会の不正に抗う力を獲得していくには、対話の中で自分の考えを突きつめ、本心を探り続ける力を幼児期から身につける必要がある。対話できる社会では、子どもを第一に考え、子どもの力や可能性を信じ、その姿や表現を喜び、社会のあらゆる場面で参加を求める。白石は、子どもは自分の欲求や思いを、大人と同じような言葉で表現することはできないからこそ、子どもの言葉をどう理解するかが周りの大人や保育者にかかっていると言う。(16-8) 大人が子どもの意見に価値を置いたとき、肯定的な眼差しと姿勢が生まれ、子どもの力は一層発揮される。その期待に子どもは必ず応えてくれる。暉峻の言う、「毎日の体験と、

知識が有機的に結びつくことによって知識は人格の一部に」(18-84)なる。

原発や産業廃棄物による自然汚染、差別、貧困等、未来への不安要素が山積する日本において、対話する社会の構築が解決への一歩になる。英国の幼児教育システムを知るプレイディミかこが、言われたことを上手にやる天使の大量製造と比喻する日本の幼児教育。日本の保育士配置基準は、北欧や英国に比べると低い。対話力だけでなく子どもの命さえも奪われている¹⁷⁾。

スウェーデンが世界で最も民主主義が進んだ国と言われるのは、就学前学校から教師が態度で示し、その価値観を伝えているからである。そして、課題を認識した上でできることを考え続ける姿勢が一步先の未来を創り続けるからである。

持続可能な社会を目指した時、今の社会をどのように捉え、何を課題とするのか。私の足元を問えば、保護者と共に、子どもの立場に立つて必要な支援を考えることから始まる。福祉をサービスで終わらせないためにである。自然と社会を軸にした保育の実現のためである。

おわりに

自然と共に生きていた祖父母と共に過ごした幼少期。春先の田んぼのにおい、香る満開の菜の花、朝を知らせる蝉の声、秋の夜に沈む太陽の色、雪に覆われた真っ白の世界。これらは、筆者にとっての原風景である。社会の波に揉まれ過ぎた時、ふと目にした自然が私に原風景を思い起こさせ、あの頃感じていた安らぎに似た感動をくれ、心の縛りを取り除いてくれる。

五木が、フランクルの著書で、人間を極限状態の中で生かすのは、生活の中にあるささやかな幸福感や一瞬の陶酔感、そんなちょっとした喜びを感じる感情のひだだという。その幸福感は、自然・人との支え合い・芸術がくれる(4)。

自分を見失い、人と関係を絶ち、生きることの苦から逃れるために自ら死を選ぶ人が後を絶えない日本。ささやかな喜びさえも感じられず、金銭的にも時間的にもゆとりがない社会になっている。昨今のヨガや瞑想ブームは、意識して立ち止まらなければ今ここにいることへの幸福感が持ちにくくなっていることの表れではないだろうか。視覚から入ってくるあふれんばかりの情報を身体に取り込むのを止め、目を閉じ、心の動きに焦点をあてて自分を感じることで味わえる幸福感。身体は常に心と共にある¹⁸⁾。

生きるとは、どういうことか。筆者は、センターで出会った家族から、この世界に存在し、生きていることのすばらしさを教えてもらった。あるがままを受け入れる社会は、命の尊さを知っている¹⁹⁾。

暉峻は言う。人が生きがいを感じる社会は、潜在的な能力が発揮されやすい、自由で多様性を許容する社

会であり、そのためには教育や社会保障や社会資本が、それぞれの人生を支えることが必要だ、と。そして、互いに個性を尊重し合い、足りないところを補い合い、助け合って、豊かに生きていくことを喜びとする、人々の意識や感受性が活きていることが必要だ、と。一人ひとりの生命を尊重し、存在そのものが受け入れられる社会は、多くの人が心地よさを感じる。暉峻が言うように、「人のことを慮るということは豊かさのひとつ」(18-46)であり、誰とも違う個性を認め、多様性を“当たり前”に思える社会が、命を明日に向かわせるエネルギーを生む。

センターを発信地とし、よりよい支援ができる幼児教育施設が増えることを願う。地域の幼児教育施設がどの子どもも受け入れ、保護者と共に、仲間と共に学びあうことが、障害を受容できる地域社会を作り、インクルーシブな社会を実現させる。

理想はすでに謳われている。日本国憲法は、主権が国民に存すると宣言し、1947年教育基本法前文には、「民主的で文化的な国家」を目指すことを謳う。一人ひとりが民主主義の精神の下、主権者であることの実感、自然享受権を意識する社会においてその国家は実現し、対話することで豊かさを増す。

普段関わる人と対話できているか。子どもにとって大事だと思うことを保護者に伝えられているか。同僚と語り合って保育を創ることができているか。空気を読むだけではできない。対話は日常を変える。

追記

本稿を仕上げるにあたり、「チャンスがある時に」と北欧研修参加に向けて背中を押して下さった小川裕子元園長、研修中にクラスの療育を守って下さった同セクション職員、研修にお誘い下さった杉山浩之先生、学びと一緒に深めて下さった北欧保育研究会の皆さん、対話することの重要性を身をもって示しご指導下さった徳本達夫先生、これまで関わって下さった皆さんに感謝申し上げます。

補註

1) 保育園時代の報告は、『広島文教教育』第28巻(広島文教女子大学教育学、2014年)にておこなっている。卒業論文でも取り上げたが、ドイツ・ミュンヘン市は、子どもに優しい街を目指す市である。その一例に、子ども代議員がある事柄について議論した後にはその意見を子ども代理特別専務官が行政に持ちあげ、成果が残るように文章化し公表する。(8)

子どもと共に過ごす者の心構えとして、倉橋惣三が言うことを実現する必要がある。何年経っても変わらない、幼児教育の本質を突く言葉である。「新しくなるというのも、必ずしも変化ということには

限らない。同じ感じ方でも考え方でも、観方でも、その深さや渋やかさや、わけても、その鮮度が加わるのである。新しいとは生きていることである。鈍っていないこと、だれていないこと、気のぬけていないことである。そして、それは反省によるのみ、自己を新しくいのちづけ得られるのである。教育者の新年輪は教育者としての新鮮度の更新である。」(10)

2) 広島市の療育は、保育士と子どもが1:2の比で配置される。これは、療育を創ってきた保育者と保護者が子どもの人権保障のために勝ちとった環境である。クラスは、6~10人ほどで構成される場合が多く、子どもの人数に応じて複数の担任が配置される。個の願いに気づける背景に、人的環境も関係している。複数担任のメリットは、多様な視点で子どもの姿を解釈し、多様な実践を考え出すことにある。複数の目で捉えたことは、課題に向き合う心強さを生む。また、経験年数の異なる職員同士が直に学び合うことで新たな価値観が生まれる。クラスを運営するリーダー職員にとっては、職員集団を組織し、複数の意見を療育に反映させながら実践する力量が求められる。限られた時間の中でいかに取り組みを考え、振り返りを次に生かせるかが鍵となる。

もう一つの大きな特徴は、入園後9カ月間を親子で通園し、保護者も療育に参加することである。それは、子どもとの二者関係・共感関係を強めること、保育士と一緒に取り組む中で変化や成長を感じて親としての手ごたえを得ること、子どもを真ん中に仲間づくりをすることをねらった期間である。

自閉症やADHDと診断された子どもは、障害特性からくる困難性や触覚の過敏さで夢中になれる遊びが作りづらく、偏食や新しい場所が苦手や外食を楽しめないことがある。また、楽しさを共有するために振り向いてくれない、何を思っているのか分からないといった不安から子育ての手応えを感じられないことも多い。親子通園をしていると、ゆっくりと発達する我が子と他児を比べてできなさを感じて涙すること、どうしてもうまくいかず不甲斐なさを感じる保護者もいる。しかし、登園を重ね、表情が変わり、視線が合うと、気持ち共有できたと実感する瞬間が増える。たとえ小さな変化でも、その姿の価値を保護者と共に喜び合えることが、困難な育児であっても子どもを可愛いと思える勇気になる。9カ月の親子通園は、時代の流れからすると厳しい条件で、経済的理由で入園を諦める場合もある。しかし、幾度となく葛藤して過ごす9カ月での、子ども、保護者、保育者の変化は、相互に循環することでより質の高い変化となり、かけがえのない時間になる。親子通園期間終了後も、日々の療育で大切にしている視点を保護者に伝えるため、毎週

クラス懇談を行う。障害受容・子どもの生活や発達・身体機能・就学等に関する研修を、保育士・セラピスト・看護師等が実施している。保護者が学べる場を保障し、よりよい生活づくりができるように支援する。

- 3) 持続可能とは、「ある資源を利用するときに、環境に悪い影響を与えず、使いつくすことなく、継続的に利用できる」(⑦-8) こと。そして、開発とは、「生物（人を含む）の発達や成長、発達した状態、発展して生まれるもの、事業などの発展、ものごとの進展」(⑦-9) という意味を含み、「今ある状態からもっとよい形に変わること、変えていく取り組みのこと」(同頁) を表す。SDGsの17の目標は、「5つのP」の要素（People 人間／Planet 地球／Prosperity 豊かさ／Peace 平和／Partnership パートナーシップ）のいずれかに関わるものである。
- 4) ゴミため場で売れるものを探し、2～3日かけてやっと80～110円を得る避難民の15歳のナイジェリアの少年。重度の急性栄養不良に苦しみ2歳で6kgしかなかった南スーダンの幼子。8歳で学校をやめ、3年間住み込みのお手伝いとして働いている間は、学校にも行けず、やっと学校に行けるようになった現在は街灯の光の下で宿題をするバングラディッシュの14歳の少女等。視野を広げると、貧困、飢餓、不平等、差別に直面し、将来の幅を狭められている子どもの姿が見える。自国でも、子どもがみな幸せな乳幼児期を過ごしてはいない。(⑦)
- 5) 知業経済では、付加価値を生み出す経済活動の中心が、ものづくりの工業から、知的財産などを生み出す知業に移行する。その知業時代に、教育システムも対応が必要で、「自分で考え、自分で行動し、自分で判断する」という、北欧の学校に浸透する思想が必要であると、川崎はみる。(⑨-V)
- 6) スウェーデンでは、1975年就学前保育法により、幼保一元化がなされる。1996年、デイケアセンター等も社会庁から学校庁へ管轄が変わり、名称「förskola（フォアスコラ、就学前学校、英語表記はpreschool）」となり、幼保一元化が実行される。1998年、就学前学校の教育・保育要領、ナショナルカリキュラムが導入される。教育及び保育は、働いたり学んだりといった保育を必要とする親の要求に応えることから、家庭の状況に関わらず、全ての子ども自身に保障されるべき権利への転換が求められ、入学は子どもの権利と明示される。就学前学校は「生涯学習の第一歩」と明確に位置付けられ、保育が必要な家庭の子どもだけでなく、全ての家庭の子どもを対象とする（両親休暇が450日あり、0歳児の受け入れはない）。2010年、2018年に新学校法、就学前カリキュラム、共に改定。(⑮)
- 7) 鈴木が著書で取り上げる社会科教科書は、日本の

小学校高学年を対象とし、日本が公民・現代社会・政治経済・道徳として扱う分野を含む。鈴木が取り上げる内容の一例を挙げる。「社会を発見する」というテーマでは、社会には目に見えるもの（学校、病院、道路、家、車、牢屋、人間等）と見えないもの（法律、男女の役割、男女平等、民主制、税金等）があり、人間が社会を作った理由を、生存の可能性を高めるため、基本的に他の人と一緒にいることに幸せを感じ、一人よりも多くのことを学べるためだとする。社会には様々あるが、そこに生きる人々が協力しあい、何らかの法律や規則、規範に従うことが全ての社会に共通すると記す。法律や規則があると他人の行動を予測でき、安心感が得られるが、社会の変化によってそれらは変わるとも記す。また、情報の発信・受信手段であるメディアは民主制の道具であるが、Facebook・instagramといったソーシャルメディアに年齢制限がある理由や、大本の企業の収入源を考えるようになっている。メディアを通じて得た様々な資料を批判的に読むことの大切さも取り上げる。

- 8) スウェーデンに根付くこの権利は、アウトドア教育の一環である、森のムッレ教室の広がりにつながる。ムッレ教室は、教室開始から1997年までの40年間で200万人の子ども、つまり、国民の4人に1人が参加していることになる。スウェーデンに拠点を置く企業も環境に配慮した取り組みを実施する。大量生産・安さを重視し自然環境保護とは遠い存在にあると思っていたファストフード。しかし、スウェーデン発祥の、あるハンバーガーショップは自然環境を保全するために、太陽光発電の電気を使用したり、消費者が商品を手にするまでに排出されたCO2量を換算し、その120%を還元できるように植樹をしたりしている。街づくりにおいては、バイオガスで走るバスや、ゴミ収集車が住宅街に入らなくてもゴミの回収が可能な方法を取り入れている。教育の現場のみならず、国全体で持続可能な社会に向かう。
- 9) レッジョ・エミリア・アプローチは、子どもの心理的時間にあわせて活動が行われること、物事との対話を支える素材や道具の設定に特徴がある。このアプローチでは、一つのテーマにおける保育実践をプロジェクトと呼び、子どもの中で物事との対話が成熟し創造の地平への心理的転回が生まれるまでの期間を重視する。プロジェクトのテーマは、どの地域のどの子どもの日常生活の中にもある事物（木、水、光と影、身体、命、街、群集等）への哲学的主題で構成される。これらは、当事者意識の持てる学習課題といえる。プロジェクト後は、保育活動を可視化した記録文書（ドキュメンテーション）が作成される。それをもとに、「保育者同士、または子ど

- もと保育者同士と一緒に活動を振り返り、省察して、次の展開を考えるという教育的な作業方法」(⑩-はじめに iii) である、教育的ドキュメンテーションも作成される。マラグツツィは、「成熟にかかる時間を大事にしなければなりません。発達の時間、ものごとをやってみたり考えたりする道具の時間、子どもの能力が十分にゆっくりとすばらしく輝き、またつねに変わりながら姿を現すのにかかる時間を、大事にしなければなりません。それは、文化的・生物学的な知恵のものさしなのです (Edward et al., 1988; 佐藤ら, 2001: 256頁)」(⑫-79) と説明する。
- 10) スウェーデン国定カリキュラムでは、アウトドア活動において自然循環を学ぶことの大切さを取り上げている。「児童は環境に責任をもち、世界的な環境問題に対して、自らが考え、行動する機会をもつべきである。また、アウトドア活動によって、児童は社会がどのように機能しているのか、我々がどのように問題解決すべきなのかを学習することもできる。そうすることで、児童は持続可能で、最善の方法を用いて自然の中での時間の過ごし方を学ぶに違いない (Lgr11, 生物学の学習内容)」(③-187) と記されている。
- 11) 森のクニユータナ教室とムッレ教室を活動の一環として取り入れる私立園で一般的なスウェーデンの保育活動を基盤にする。2011年開園、現在8年目。子ども72名、保育士12名(2018年)。1950年代に開発された居住地の再開発地区に位置する。以前は工場だった建物のワンフロアが園舎で、違う階には自治体社会福祉等が入る。園庭はなく、市所有の森や公園に行く。市所有のため、視察時は他園の子どもも遊びに来ていた。近隣でも、森での活動を実施しない園もある。(www.branningevagen.se/, 2019年12月23日閲覧)
- 12) 園舎はあるが、野外活動を中心とする園で、ほぼ毎日森や湖にでかける。野外活動を通して、「冒険への挑戦」「自由・時間・可能性の感覚」「創造性」「協働」「自然への好奇心」「運動技能」「安全確保と安心できる方法」「言語」を学ぶ機会の保障を目指す。(www.villvettene.no, 2019年12月23日閲覧)
- 13) サムリングとは、「子ども一人ひとりが自分の考えや意見を述べ、話し合いをする」(⑩-8) こと。
- 14) 日本の障害福祉は2012年の児童福祉法改正によって、「契約制」「応益負担」「日額報酬」という利用者、施設双方に大きな負担を課す問題点はそのままで、児童デイサービスが児童福祉法に組み込まれ、障害種別ごとに分かれていた施設体系を一元化した。現在、企業の参入緩和が行われ営利目的の株式会社が入参し、サービスの質が大きな課題である。
- 15) 「総合芸術としての文化的プロジェクト」を通して、子どもを地域みんなで育てること・おとなの居場所を創ること・街が好きになるコミュニティを創ることを目指す。特定非営利活動法人こととふラボと特定非営利活動法人パラ・ラ・ムジカによるプロジェクトチーム。筆者は、このプロジェクトのキックオフフォーラムに参加した。
- 16) 1889年から民主主義を謳うコスタリカは、第二次世界大戦後の1948年に軍隊撤廃を宣言し、翌年に常備軍禁止を謳った憲法を公布・施行した。宣言をしたのは、内戦直後に武力蜂起したホセ・フィゲレス・フェレール。彼は、「道徳的な力は原子力よりも強力」という言葉を残す。
- コスタリカはその地政学上、アメリカの戦略的関心は高かった。しかし、「当時の国内的・国際的政治情勢などを鑑みて、ひとつの現実的な政策として社会のリーダーたちが実行」(①-36) したのが軍隊撤廃である。そして、軍隊や戦争に費やしていた国費を教育や医療、福祉に回すという考えが国民に受け入れられた。足立はそれを、有事に際して非軍事的な対応を模索し続け、軍勢力を排除することでかえって有事に対応しやすくなるまで国際的な立場にもっていった推進力の結果だと見る。加えて、「誰かの意志が行動を生み、そのいくつかシステムとなって後世に残る」(①-38) ののであって、意志と実行力があれば軍事撤廃ぐらいできると言いきる。軍隊廃止後もギリギリの選択を迫られる中で、最小限の被害で紛争を終わらせるために周到な計算と準備を怠らなかったリーダーたち。紛争の仲介に乗り出した時には、フィゲレスの妻オルセンが中米特命大使として任命される。彼女が選んだ解決策は、中米各国のファーストレディを招いての会談で、一人の女性として、母としての立場を問い、主人を交渉のテーブルにつくよう説得してほしいと話した。その思いが、主導者に一番近い女性である彼女らを動かした。紛争当事者たちは交渉の席に着き、中米和平交渉を妥結した。「軍勢力を全く使わなかったわけではないが、最終的にものを言うのは軍勢力ではなく、外交力だった」(①-72) と足立がみるように、対話する姿勢が世界を武力から解放する。コスタリカのリーダーたちは、「平和が向こうから『訪れる』などという考え方はしない。平和は自分たちで『つくり続ける』もの」(①-42) だと考える。主権者がこの感覚をもつことが、対話する社会を育てる。この感覚をもつリーダーを育てられるかが主権者に託されている。足立は、コスタリカ共和国憲法をみれば軍勢力の制限はあるものの軍隊をもつことはでき、コスタリカ国民が憲法をさらに縛る法的枠組みが国連憲章だと断言するが、軍隊をもてない法的根拠にはならないという。70年もの間、軍隊をもたずに今日まできたのは、国民も政治

的リーダーも軍隊をもたないと決めたからである。解釈に余裕がある条文があるにもかかわらず厳格に憲法を運用するのがコスタリカなのである。「私たち自身に内在する『人の力』を、もっと信じたほうがいい」(①-38)という言葉の真意が分かる。

「環境先進国」ともいわれるコスタリカ。自然界の多様性、生態系の循環のバランスは、人間社会と相似関係にあると考えるからこそ、豊かな自然は守られ、対話する社会はさらに上を目指す。

2016年に製作された、マシュー・エディー、マイケル・ドレリング監督の映画「コスタリカの奇跡～積極的平和国家のつくり方～」もコスタリカを理解する手掛かりとなる。この映画は、国民の幸福度を最大化する道を選んだコスタリカの奇跡に迫ったドキュメンタリー。コスタリカは軍事予算をゼロにしたことで、無料の教育、無料の医療を実現し、環境のために国家予算を振り分けてきた。国家予算における教育費の割合をGDPの6%以上とすることを法的に決めている。その結果、地球の健全性や人々の幸福度、そして健康を図る指標「地球幸福度指数(HPI)」2016の世界ランキングにおいて140カ国中で世界一に輝いている。制作国はアメリカとコスタリカ。(https://www.cinemo.info/48m、2019年12月23日閲覧) 筆者は、「Social Book Cafe ハチドリ舎」(広島市)での上映会に参加した。上映後、参加者で意見交換会があった。1992年～1995年まで、コスタリカ大使館付属小学校で教師をした男性が、小学2年生の子どもたちが大統領は誰が良いか話していたと自身の経験を述べた。自分のこととして政治をとらえ、違和感を覚えた時に声を挙げる国民性が、平和へと歩ませる。大人たちが対話し、折り合いをつけながら世界を創るその姿勢は、何にも勝る、子どもに示す価値ある姿である。

アメリカの森林学者、自然学者で作家であるフロイド・シュモ어도対話をする姿勢をもつ。シュモードは、原爆投下に心を痛め、「平和は語るのではなく、行うことで作られる」という信念の下、住まいを失った人々のため、米国から同行した仲間や日本の学生ボランティアと一緒に「広島の家」建設作業に従事した米国人である。1949年～1953年まで活動し、住宅20戸と集会所1戸を完成させた。(ひろしま市民と市政 通巻1653号) また、「鶴を折ることで戦争はなくなるけれど、鶴を折ることで友だちができ、仲良くなれるかもしれない」との言葉を残す。(NHK ETV特集シリーズ アメリカと被爆者 第1回「シュモードさんを探して」より)

- 17) プレイディみかこは、英国で平均収入、失業率、疾病率が全国最悪の水準と言われる地区にある無料の託児所で地べたを知る。(⑱-裏表紙)「社会が本当に変わるといことは地べたが変わるといこと

だ。」(⑱-84)の指摘は胸を打つ。「保育施設で『排泄』とともに最初に徹底的に教え込まれるコンセプトは『シェア』」(⑱-116)だ。生理現象の次にくるのが分配なのである。玩具の貸し借りで、シェアしないとフェアじゃないと友だちに主張する4歳児の事例において、彼女は子どもに「It's not fair, if you don't share! It's not fair, if you don't share!」(⑱-117)とラップ調の歌にして投げかける。それに対し、「It IS fair, if you don't share! It IS fair, if you don't share!」(⑱-118)と即興で反抗的なラップにアレンジしてする4歳児。英国のEYFSという幼児教育カリキュラムによれば、「4歳で小学校に入学する前に、子どもたちは自分の意見をしっかりと述べ、他者を説得する努力をする姿勢を身につけていなければならない」(⑱-114)。この著書において、英国の保育士配置基準は、0歳児と1歳児で1:3、2歳児で1:4、3歳児と4歳児で1:8であることを知り、日本の保育士配置基準の低さを思い知った。また、現実問題としては難しいが、「障害児を障害児だけが通う教育施設に閉じ込めるのではなく、健常児と同じ場所で教育を受けさせましょうという法律が90年代に制定されている」(⑱-212)。

- 18) 「自分が何者なのか。今の人生の状況がどのような状態なのか。バランスを取り戻すためには、それらのことをまさに自分自身で考えるべきなのです。人としての成熟度が増せば、自分を知り、自分のバランスを保ち、自分が誰かを知ることができるのです。変化に富んだアウトドア環境は、私たちの気質や気分に対応することができるのです。私たちは、快適さや喜びといった様々な感情に見合った場所を探しています。感情に見合った場所を探す場合に、大人は、自分が好きだった場所にそれを求める傾向があります。(Grahn, 1991)」(③-79)と、著者の一人、グランは言う。
- 19) 400gの超低出生体重で生まれてきた男児は死と生の境界線付近を何度も通りながら命を生に向かわせ、現在、特別支援学校に通う。周りの大人がその子どもの存在を喜び、無条件に愛することが、その子どもが持つ生きる力を強くさせることを実感した。その一方で、生きようとする力をもちながらも、ちょっとした体調の変化が重症化し、在園児2人を天に見送った体験もある。明日会える保障はどこにもない。「また明日」と声をかける時、今日がその子どもにとって幸せな一日であったかを自分に問い、また明日会えることを願う。

引用・参考文献

- ①足立力也『丸腰国家～軍隊を放棄したコスタリカ60年の平和戦略～』扶桑社新書、2009年。
②アレックス・ミラーニ 水沢透訳『レッ

- ジョ・アプローチ 世界で最も注目される幼児教育』文藝春秋、2017年。
- ③A. シェパンスキー・L.O. ダールグレン・S. ショーランド編著 西浦和樹・安達智昭訳『北欧スウェーデン発 森の教室 生きる知恵と喜びを生み出すアウトドア教育』北大路書房、2016年。
- ④五木寛之『新・幸福論—青い鳥の去ったあと』ポプラ社、2012年。
- ⑤一般財団法人日本野外生活推進協会（森のムッレ教室）発行『森のムッレ教室 リーダー養成講座』資料
- ⑥磯部錦司 福田泰雅『保育のなかのアート』小学館、2015年。
- ⑦浦城寿一『知っていますか？ SDGs ユニセフとめざす2030年のゴール』さ・え・ら書房、2018年。
- ⑧大崎亜友美『平成22年度広島文教女子大学卒業論文 子どもの感性を育む 子どもの権利条約の視点から』2011年（未公刊）。
- ⑨川崎一彦他『みんなの教育 スウェーデンの「人を育てる」国家戦略』ミツイパブリッシング、2018年。
- ⑩倉橋惣三『幼稚園の三月 幼児の教育 第50巻 第3号』1951年。
- ⑪ヨーラン・スパネリッド 鈴木賢志+明治大学国際日本学部鈴木ゼミ編訳『スウェーデンの小学校社会科の教科書を読む 日本の大学生は何を感じたのか』新評論、2016年。
- ⑫佐藤学 今井康雄編『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』東京大学出版会、2003年。
- ⑬シモン・ラックス＝ルネ・クーディー 大久保喬樹訳『アウシュビッツの音楽隊』音楽之友社、2009年。
- ⑭白石正久『自閉症児の世界をひろげる発達の理解—乳幼児期から青年・成人期までの生活と教育』かもがわ出版、2007年。
- ⑮白石淑江 水野恵子『スウェーデン 保育の今 テーマ活動とドキュメンテーション』かもがわ出版、2013年。
- ⑯白石淑江『スウェーデンに学ぶ ドキュメンテーションの活用—子どもから出発する保育実践—』新評論、2018年。
- ⑰ステイーナ・ヨハンソン 高見幸子訳『自然のなかへ出かけよう Bland stubbar kottar ムッレの森』日本野外生活推進協会、1997年。
- ⑱暉峻淑子『豊かさへ もうひとつの道』かもがわ出版、2008年。
- ⑲ブレイディみかこ『子どもたちの階級闘争 ブロークン・ブリテンの無料託児所から』みすず書房、2017年。
- ⑳『発達 通巻第152号』ミネルヴァ書房、2018年。
- ㉑『発達 通巻第154号』ミネルヴァ書房、2018年。
- ㉒『発達 通巻第156号』ミネルヴァ書房、2018年。